レトロ・レトロの展覧会 2023 特別陳列 朽木陣屋跡

幻の朽木城を探る －朽木陣屋以前の姿－

令和5年（2023年）12月11日／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

遺跡と調査の概要

遺跡の概要　朽木陣屋（くつきじんや）は、中世名族の佐々木氏の流れを汲む朽木氏が、所領を治めるために現在の高島市朽木大字野尻に設置した陣屋です。以前からあったとされる朽木城を、江戸時代になって陣屋に改築したという説が有力ですが、はっきりしていません。昭和58年（1983年）3月28日にその一部が「朽木陣屋跡」として県史跡に指定されました。安曇川とその支流である北川の合流点の段丘上に立地し、若狭街道や安曇川の水運などの交通の要衝になります。

平成12年（2000年）には、滋賀県教育委員会と当協会が主要地方道小浜朽木高島線道路改築工事に伴って、遺跡範囲南部で発掘調査を実施したところ、堀や橋・石列・登城道（とじょうみち）などが見つかりました。これらの遺構の一部は、少なくとも室町時代の15世紀前葉にはすでに築かれ、江戸時代まで利用されたと考えられます。

平成20年（2008年）には、高島市教育委員会が遺跡の保存状況や内容を確認することを目的に、遺跡範囲北部で発掘調査を実施しました。江戸時代後半の土蔵跡や台所跡・馬屋跡などが見つかっています。

調査の概要　今回の発掘調査は、県道小浜朽木高島線単独道路改築事業に伴い、令和4年（2022年）7月から11月にかけて実施しました。調査地は平成12年発掘調査地の西側に隣接します。調査地東部では平成12年に見つかっていた堀や石列・登城道の延長部分が見つかり、また調査地西部では土坑などが見つかりました。

※陣屋とは、江戸時代の大名領の藩庁が置かれた屋敷や徳川幕府直轄領の代官の住居や役所を指すことが多いが、3万石以下の小大名の屋敷や大藩の家老の所領地である知行所の政庁なども陣屋と呼ばれる。朽木陣屋は後者です。

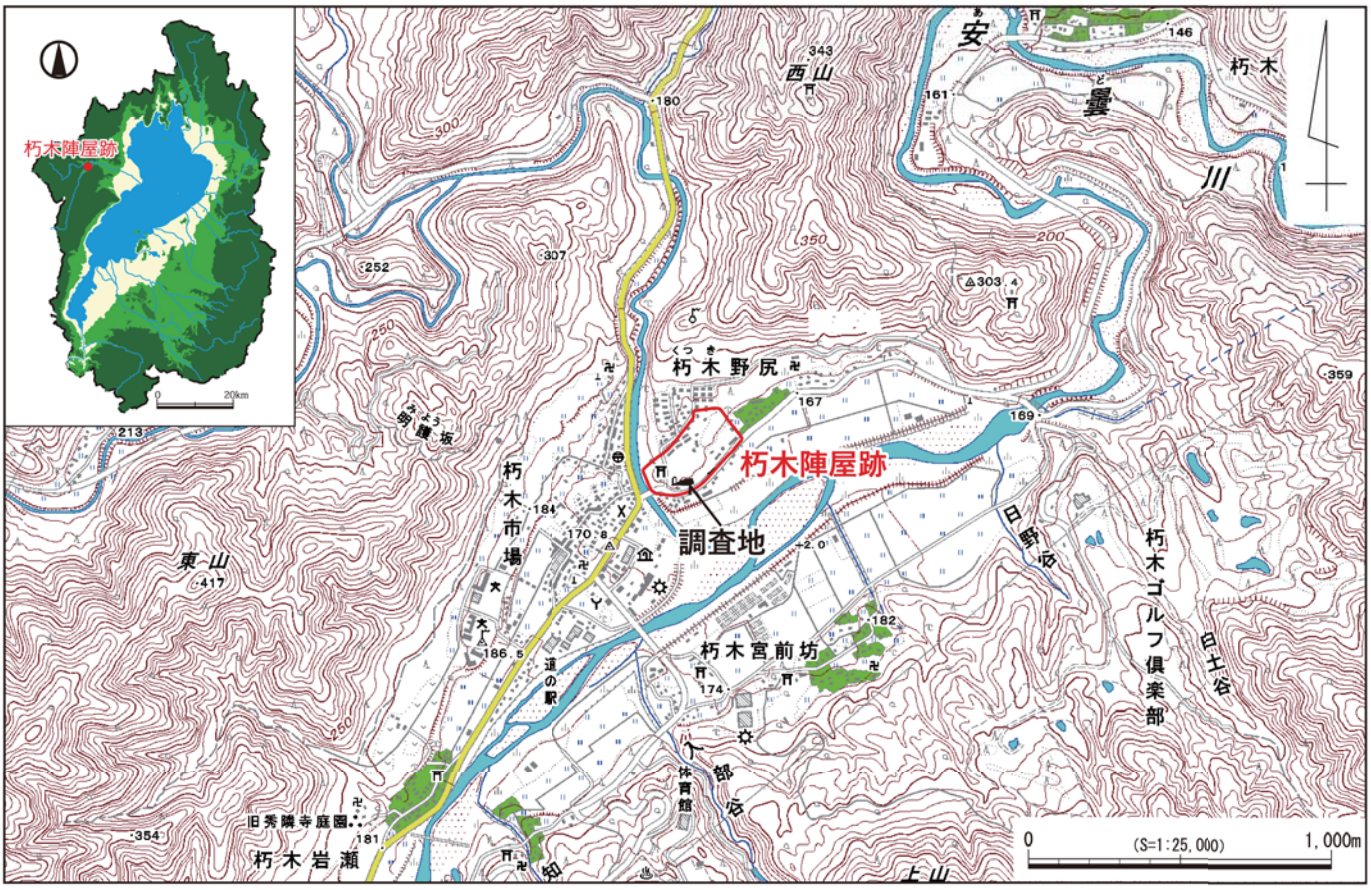


図1　朽木陣屋跡の範囲（赤色）と今回の調査地点（黒色）

12年に見つかって
屋の堀・登城道・石
見つかりました。こ
絵図(図3)とほぼ同
。
などが見つかり、
前の室町時代(15
が出土しました。

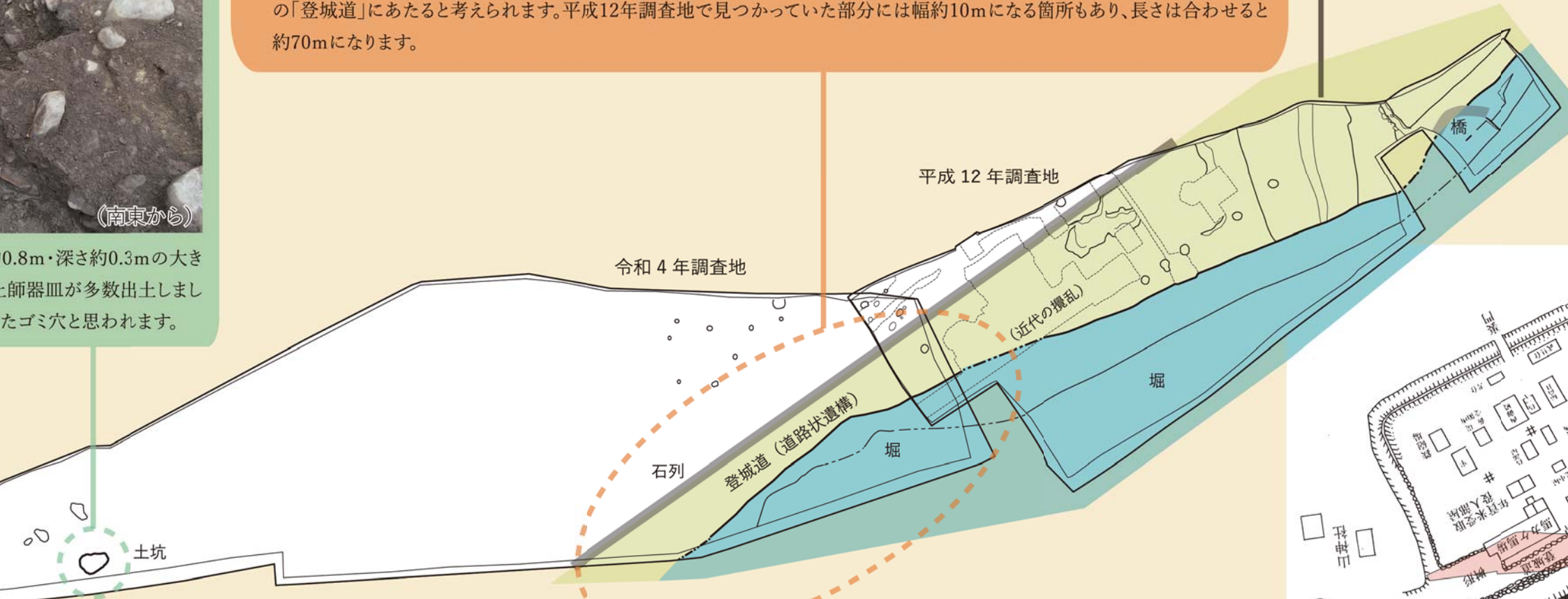
堀　調査地東部で、幅5m以上、長さ約16m分が見つかりました。深さは、最も深い箇所で約1mを測ります。東側に隣接する平成12年調査地で見つかっていた部分と合わせると、長さ約65mになります。埋まった土砂を観察したところ、人為的に埋め戻されていることがわかりました。

石列　調査区東部で、長さ約23m分が見つかりました。平成12年調査地で見つかっていた部分と合わせると、長さ約47mになり、主軸は北から約60度東へ振れます。この石列を境に北西側は一段高くなっていて、後で述べる登城道と城内を区別する役割のものです。使われている石の多くは丸みを帯びた川原石で、大きさは直径30～50cmを測ります。いずれも近接する安曇川で現在も採取することができるものです。

登城道(道路状遺構)　堀と石列の間は平らな面になっていて、幅2.5～3.5mを測ります。道路状遺構と考えられ、陣屋絵図(図3)の「登城道」にあたると考えられます。平成12年調査地で見つかっていた部分には幅約10mになる箇所もあり、長さは合わせると約70mになります。

平成 12 年 (2000 年)
(滋賀県教育委員会・財団法
2003『朽木陣屋

0.8m・深さ約0.3mの大き
土師器皿が多数出土しまし
たゴミ穴と思われます。



出土した遺物

遺物はおもに堀や土坑から出土しました。朽木陣屋が置かれた江戸時代の遺物は少なく、それ以前の室町時代のものが多くを占めています。東側に隣接する平成12年調査地では、堀の中から江戸時代の陶器や磁器も多く出土していましたので、この違いは堀に隣接する建物・施設の違いによると考えられます。

江戸時代の遺物　少ないながらも、肥前で作られた磁器碗や瀬戸美濃焼の向付（むこうづけ）、信楽焼の擂鉢（すりばち）などがあります、そのほか、獣（獅子か？）の顔が型押しされた陶器片や銅製煙管（きせる）なども見つかりました。

室町時代の遺物①　陶器　信楽焼の擂鉢や、東海地方の尾張・美濃にある瀬戸美濃焼の皿・水滴（すいてき）（硯に水を注ぐ道具）、常滑焼のこね鉢（擂目（すりめ）のない擂鉢）・甕などがあります。いずれも日常生活で使うものです。

室町時代の遺物②　磁器　当時の日本には磁器を作る技術はなく、いずれも中国大陸からの輸入品です。青色に発色する釉薬で文様を描く青花（せいか）の碗や、青磁・白磁の碗・皿などがあります。とくに青磁の梅瓶（めいびん）は、珍しいものです。

室町時代の遺物③　土師器皿　とくに調査地西部の土坑から多数出土しました。口径10㎝前後の小皿と口径13.5㎝前後の大皿があり、小皿は酒を飲む盃（さかづき）によく使われました。土師器には、ほかに煮炊きに使う羽釜（はがま）などもあります。

発掘調査でわかったこと

①調査地東部では江戸時代の朽木陣屋のものと考えられる堀・石列・登城道が見つかりました。これらは平成12年の発掘調査で見つかっていた堀・石列・登城道の西側の延長部分にあたります。

②堀から出土した遺物に江戸時代のものは少なく、多くが室町時代のものです。これは、堀に面していた陣屋の施設が、生活の場ではない「馬カケ馬場」（図3）で、投棄されるゴミが少なかったためと考えられます。

③調査地西部では土坑などが見つかり、室町時代の土師器皿などが出土しました。

④上記の②や③でみたような室町時代の遺構や遺物は、朽木陣屋以前にもこの場所が利用されていたことを示し、従来の調査・　研究成果もあわせて考えると、実態が不明瞭な朽木城の存在を示しているのではないか、と考えられます。

今回の調査では、室町時代から江戸時代にかけてこの地がどのように利用されてきたのかを知る多くの情報が得られました。今後もさらに検討を重ね、朽木陣屋の歴史を解き明かしていきたいと考えています。